

(独)Selbständigkeit / Unselbständigkeit

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43355

ある対象がそれ自体で存在しうるのかそれとも他の対象に付帯してのみ存在しうるのか、という事象の純粹本質にもとづいている。すなわちそれは「〈別の仕方では存在することができない〉という客観的イデア的な必然性」に従っているのである [LU II/1 239]。したがってここで非独立性の概念は、質料的存在論 (materiale Ontologie) の内実をなす本質領域での純粹な種、類に関する本質法則性として捉えられている。たとえば、同じ平面上ではいかなる二つの色も相互に排除しあうという法則性は非独立的部分相互間の連繫 (Verknüpfung) の仕方を支配する法則性であるが、それは形式的な分析的アプリアリではなく、質料的な総合的アプリアリである。独立的／非独立的の区別は、さらに全体と部分の純粹形式に関する理論を基礎づける。[→] ④裂機／断片、全体と部分、独立的意味／非独立的意味 (柴田正良)

独立性／非独立性 [(独) Selbständigkeit / Unselbständigkeit]

対象性一般に関する存在論的区別。シュトゥンプによれば、ある対象 (内容) がその本性上〈単独に〉〈別個に〉表象されうる場合それは独立的であり、そうでない場合にはそれは非独立的である。たとえば馬の頭はそれ単独で、周囲のあらゆる変化を通して不変なものとして表象されうるが、紙の白さをその紙の空間的延長から切り離して別個に表象することはできない。この意味で前者は独立的対象であり、後者は非独立的対象である。しかしフッサールによればこの区別は、「表象しうるか否か」という主観的事実ではなく、